

はじめに

本号は昨年を引き続いて「岐阜県の河川問題」を特集テーマとすることにしたが、この場をお借りして、本特集にも論文を寄せられ、また本学にお来し以来毎号のように本誌に寄稿していただいた南清彦先生に対して、お礼とお別れの言葉を記させていただくことをお許しいただきたい。南先生は8年前に和歌山大学定年退職のあと本学に着任され、本学の、とくに地域経済関係に格別のご尽力をいただくことになった。それは、地域経済研究所だけでなく私個人にとってもそうであり、この8年の間に、私は毎年のように先生と共同研究をさせていただき、その中で多くのことを学ばせていただいた。つい昨日までのことなので多くの思い出が次々にわいてくる。例えば県下のある地域へ調査に出かける必要が生じ、私は自分一人では頼りないので先生にたいていお願いすることにする。時間の余裕はまだ十分なので、2週間か1カ月ぐらい後で十分、それまでは好きな本でも読んでいようとゆっくりしていると、先生はいきなり翌日に、さあ出かけよう、ぼんやりしている幕ではあるまいとばかり熱心に急かされるので、あわてて持つものももたずタクシーにとび乗ることになる。おかげで筆記用具以外何も持っていないのに、南先生は車のついたカバンに地図やカメラを十分つみ込んでいて、その後を私が追いかける、といったような調子であった。70才をも過ぎておられるのに、その執念・好奇心たるや大変なもので、たとえ地の果て天の果までも先に立って調べるぞ、といった具合であった。何度もお伴をさせていただいた中で、今でもまざまざと思い出すのは、本学の北西奥地にある徳山村へ出かけたときのことである。メモを見ると昭和62年11月3日のことで、その日は曇り日でなま暖かいような、またうす寒いようなわびしい感じの日であった。奥へ奥へと向って行くに従いあいにくの小雨もようとなった。村にはもうほとんど人々もいなくなり、数えるほどの人と廃家が残存するだけである。聞きしに勝る秘境的なその村の一番頂上の小集落跡にまで進んで足を運び、カベも柱もくずれ落ちた廃家をグルグル回るようにしながら、盛んにカメラのシャッターを切っていた先生の姿は、印象的なものであった。ズボンの下の方にはトゲトゲの草がいっぱい付いているのに、そのようなことには一向に意にかいされないその姿が、失礼ながらなんだかおもしろく愉快に思えてならないのである。幾重にも山々が並び立ちその山頂に霧雨がたちこめる中、このふもとの一帯もすべて水の中に沈むのかと、一つの村が消滅することに大きな重いものを感じないわけにはいかない徳山村であったが、【村史】によれば今から1.5億から2億年前、この奥地山岳高地域の村も海底だったとか。縄文時代以来住み継いできた先祖伝来の村が、ダムという余儀ない事情のためとはいえ水没、消滅してしまうことはやはり言葉に言い表し難いものがあるだろう、そうした村の様子と南先生の姿を重ねながら、その折を思い出しては「秋雨けむる紅葉深き山々は太古のときにまた還り行く」と愚作にもならぬメモを記しておいたことだった。

それ以外の研究スタイルの点でも南先生は、例えば五万分の一の地図を実によく利用されていたが、これは戦前帝国陸軍に従軍の時身につけられたとのことであった。ちなみに先生は、私の聞きまちがいでなければ陸軍中尉であったとのこと、思うだに意外の感がすることである。訪門先の旅館の部屋で、畳一枚ほどにつなぎ合せた地図の上に無造作に座って、地名や道路をああたこうだと確かめつつ色鉛筆でなぞっていた姿こそ、先生の面目躍如たるものがあった。また細いヒモを実によく利用して多くの資料を整理されていた。それ以外にも地域研究「七つ道具」といったものをポケットやらカバンに入れていて、その利用の様が実におもしろおかしいものであった。ヒアリング先で、謙虚に、また一見無器用に「私どもまったくの素人でございますが……」の切り口から始めて、あれこれ熱心に質問されている姿を見ては、これなら自分でもやれるぞと自信をもたせてくれるありがたい先生であった。その他、いくつものおもしろいエピソードもお持ちである。目標に向けて果敢な努力はするが、結果にはいさぎよくあきらめるという日本人の典型的特質のお人柄であったようにも思う。思うに、戦後民主主義あるいは地方大学が生み出した一人の名物教授であられたように私には思えてならない。「先生は国立大学の教官でしたので、県当局などからいろんな調査や審議の要請が多くおありでしたでしょう」という私の質問に対しては、「いや、私は批判的立場の者でしたから、そういうことはありませんでした」とのことであった。行政当局の途方もない思いちがいであった。南先生もまた本学から去られて和泉の国へ還って行かれる。しかし8年間の何かの御縁、また機会あれば本学と地域研究のためにお来し下されば、私にしてもどんなにかうれしいことである。(1992年1月中旬)

岐阜経済大学地域経済研究所

所長 柿本国弘